「牡丹灯記」受容の系譜 (三)

太刀川　清

一

読本では上田秋成にさきがけて都賀庭鐘の活躍が始るが、その庭鐘の諸作にはとりたてゝ「牡丹灯記」に拠ったと思われるところはない。強いて言うなら『英草子』(寛延二年)の「紀任重陰司に至滞獄を断くる話」(巻三)の冥府の場面がそれと言うことになろうか。しかしこれは言われるように明の『喩世明言』の「閻陰司司馬貌断獄」という粉本があって、翻案のどこにも「牡丹灯記」の直接の影響を見つけることは困難である。山口剛氏[注1]が「軽い暗示にも敏く、そこからいろ〳〵の意表に出づるものを作り出すのが庭鐘の翻案の常である」と言われたところに従えば、この翻案が「牡丹灯記」の冥府の件からヒントを得てこゝに到ったものとなろうか。それにしても「軽い暗示」を得た程度のものであった。

そう言えば、秋成と「牡丹灯記」の関係も程度の差こそあれ、やはりその域を出るものではなかった。

『雨月物語』の「吉備津の釜」が「牡丹灯記」の直接の翻案と言われたこともあったが、これは必ずしも是認されるべきものではなく、むしろ全く別の構想の上に「牡丹灯記」の趣向の幾分なりが重ねられたと言った方が正しいようである。その構想のもとになったのは女の激しい愛執が募りに募って幽鬼となり、ついには思う男をとり殺すにまで到る執念の甚だしさである。こうした構想は怪談では格好なものであったから、近世の怪異小説を繙けば随所に見られるところで、〝女人愛執の系譜〟とも言うべき一連の怪談をたどることも強ちむずかしくはない。いまこの愛執を女性特有の嫉妬(特有と言ったのは、妬婦の怨念の発現の仕方に於いてである—後述)にかえて妬婦の怨念としたらどうであろうか。それが「吉備津の釜」のモチーフである。その先例を鵜月洋氏[注2]はは るか元禄頃の『善悪報はなし』の「女の一念来て夫の身を引そひて取ってかへること」(巻五)にもとめられたが、それよりさき、嫉妬のために生霊となる例を『今昔物語』の「近江国女生霊来京殺人語」(巻二七)「人妻成悪霊除其言陰陽師語」(巻二四)に求められたのが鈴木敏也氏[注3]であった。因にこの二話を一つの構想にまとめたのが『善悪報はなし』の場合であった。

二

夫は捨てられた妻の一念が悪鬼となって来るの、経帷子の加護で救われたかに見えたが、ふとした油断から一命を失う『善悪報はなし』の趣向

は「吉備津の釜」に類似する。それに経帷子のために思いを遂げられず「あなにくやといふ声耳につきとをり」と言うのは「吉備津の釜」の末段の表現にも通じる。しかし趣向や表現の類似はさておき、『善悪報はなし』が、その書名通り因果応報のモチーフを露骨にして教誡性の濃いものであったことは確かで、そうしたモチーフを嫉妬の怨念の激しさに変えたところに「吉備津の釜」の文学としての新しい創造があったと言うべきである。そして、それを可能にしたのが「牡丹灯記」であったのである。しかし、その関わり方にしても、直接関係したのが、当の「牡丹灯記」であったのか、それとも翻案した『伽婢子』（寛文六年）の「牡丹灯籠」であったのか確かなことは不明であるが、いずれにしても秋成には妬婦の怨念の激しさを問題にさえすればよかったのである。

されば、その冒頭の設定も、「牡丹灯記」の「元夕張灯」でもなければ「牡丹灯籠」の「盂蘭盆の夜」でもなく、モチーフをむき出しにした「妬婦論」から始めることになったのである。

妬婦の養ひがたきも、老ての後其功を知ると、咨これ何人の語ぞや。害ひの甚しからぬも商工を妨げ物を破りて、垣の隣の口をふせぎがたく、害の大なるにおよびては、家を失ひ国をほろぼして、天が下に笑を伝ふ。いにしへよりこの毒にあたる人幾許といふ事をしらず。死て蟒となり、或は霹靂を震ふて怨を報ふ類は、其肉を醢にするとも飽べからず。さるためしは希なり。夫のおのれをよく修めて教へなば、此患おのづから避べきものを、只かりそめなる徒ことに、女の慳しき性を募らしめて、其身の憂をもとむるにぞありける。禽を制するは気にあり、婦を制するは其夫の雄々しきにありといふは、現にさることぞかし。

『五雑俎』の妬婦論に拠ったものであるが、肝腎なことは、秋成が「牡丹灯記」の符女や「牡丹灯籠」の弥子を妬婦に変えようとするところにもと〳〵問題があったのである。符女や弥子には妬婦となるべき要素もなければ、資格もなかったはずである。したがって「吉備津の釜」には「牡丹灯記」や「牡丹灯籠」の艶麗な幽霊物語は思い及ぶはずはなく、慳しき性をまる出しにして猛り狂う凄惨な怨霊の出現が予測されるだけであった。

わかりきった物語の筋を敢てするのが早道である。吉備津の国賀夜郡庭妹の郷の井沢庄太夫の一子正太郎は家業の農業を嫌い、酒色に耽って父の言うこともきかない。その正太郎に妻を迎えたならば身持ちもおさまろうかと、吉備津神社の神主香央造酒の娘を迎えることになった。結婚に先立って神に幸いを祈るために吉備津神社ゆかりの御釜祓の神事を行ったところ、この縁談は神の意に添わないものか秋の虫の叢にすだく声すらなかったのである。御釜祓とは、たとえば林羅山の『本朝神社考』に「吉備ノ国、吉備津ノ宮ノ裏ニ釜有リ、〈中略〉神ニ詣デル者、事ヲ試ミント欲シテ粢盛ヲ釜前ニ奠ル、福唱シ畢リテ柴燃ク、則チ釜鳴ルコト牛カ声ノ如キトキハ即チ吉、若シ釜鳴ラザルトキハ則チ凶シト云フ」（巻三）と、この神事を伝える。「吉備津の釜」の題名の由来するところであるが、その題名にしてから「牡丹灯記」の影はなかったのである。

さて、かゝる神慮を押し切ってまで正太郎に嫁いだ香央の娘磯良は舅姑にもよく仕えて、井沢家の嫁としてはこの上もなく立派なものであった。しかし正太郎の生来の浮気心は、鞆の津の袖という遊女と懇になり、これを身請けして近くに住ませ、そこに留っては家に帰らない日が続くのである。にもかかわらずいじらしく振舞う嫁を見兼ねて、父は正太郎を責めて、一室に閉じこめてしまった。このため一旦は反省したかの正太郎であったが、言葉巧みに磯良を欺き金を調達させ、袖をつれて出奔してしまうのである。いまはすべてに裏切れた磯良は病に臥し恨みなげきながら死んで行く。やがてこの磯良の怨念が「もののけ」となって再び正太郎の前に姿を現わすあたりから「牡丹灯記」との関係が始ま

ることになるが、その前に怨念はまず袖をとり殺す生霊となって現われるのである。

駈落ちした二人は、袖の従弟の彦六を播州の荒井の里にたずね逗留するうち、袖は「もののけ」が憑いたように夜な〳〵苦しみながら死んでしまう。秋成はこれを「窮鬼」と言い「古郷に捨し人のもしや」と叙べて、袖を殺したのが磯良の生霊であったことを暗示する。このあたりは「牡丹灯記」ではなく、『源氏物語』に見る妬婦六条御息所の「もののけ」のために空しくなる夕顔の女（夕顔の巻）のイメージが重ねられているところで、物語はいよ〳〵「牡丹灯記」から離れて行く気配である。磯良を妬婦とした秋成はまずこうして袖の殺害という設定をしなければならなかったのである。それは日本の物語では妬婦の怨念の発現の仕方が男の非はさておき、自分の男を奪い取った女に向けられるという、池田弥三郎氏[注4]の言うところが問題となる。そして氏はまた日本の幽霊の伝統として男にまで禍いが及んでとり殺すなどルール外れである。だから「吉備津の釜」で袖が殺されるのと正太郎が殺されるのは、話の種として別々で一続きのものではないと言う。その通りで、この別々のものを結びつけて一つの話として展開させるに役立ったのが『諸国百物語』（延宝五年）の「牡丹堂の女しふしんの事」（巻四）であった。

妻に先だたれた男が毎夜牡丹堂に行って念仏していると、いつも若い女が同じく念仏している。二人は互に悲しい身の上を語り、一緒に墓所を念仏して廻っているうちに、いつか浅からぬ仲となる。男は女を宿につれて来て契りを結ぶことになる。すなわち「吉備津の釜」で正太郎が袖を失い夜毎にその墓に詣でて悲しんでいる。するとその隣に新しい墓があって、ここにも夜毎に詣でる女がいたという段で、「吉備津の釜」後半の物語の緒であり、「牡丹灯記」導入のそれでもあった。

二丁あまり来てほそき径あり。こゝよりも一丁ばかりをあゆみて、をぐらき林の裏にちいさき草屋あり。竹の扉のわびしきに、七日あまりの月のあかくさし入りて、ほどなき庭の荒たるさへ見ゆ。ほそき灯火の光り窓の紙をもりてうらさびし。こゝに待たせ給へとて内に入りぬ。苔むしたる古井のもとに立ちて見入るに、唐紙すこし明けたる間より、火影吹きあふちて、黒棚のきらめきたるもゆかしく覚ゆ。女出で来りて、御訪らひのよし申しつるに、入らせ給へ。物隔てかたりまいらせんと端の方へ膝行出で給ふ。

主は美しい未亡人だというので、心ひかれる。正太郎を誘うのは、実は磯良の怨念のなす業であったのである。こうして怨霊の出現を前にして次第に緊張感の高まって行くところであるが、秋成の叙述の非凡さは、仮りに『垣根草』（明和七年）における伊丹椿園の類似の叙述と較べるとよい。

それは「伊藤帯刀中将重衡の姫と冥婚の事」（巻一）で、帯刀が日暮に琴引山の麓を行くと、年のころ十五六の女の童に会う。これとつれ立って、その主の住居というを訪ねる。

童いなむ色なく、さま〴〵物語しもて行くうち、松杉の一村しげれるほとりに、あやしの編戸ひきつくろひたる許にて、これこそ童が宮仕参らする方なり、道のつかれをもはらし給ひてんやといひすてゝ内に入る。帯刀も主はいかなる人やらんとみいれたるに、よしある人の隠家と覚えて庭のけしきもおのづからなる風情にて、尾花くず花露ちり、やり水に紅葉うづもれ、霜にうつろひたる菊の籬一重をへだてゝ、あれたる軒ながらに簾なかばたれて、灯かすかにきらめき、琴の音ほのかにもるゝにぞ、いとゞ其名ゆかしくたちやすらひたるに、先の童出でて云く、あるじの御方にきこえ参らせたれば、何かは苦しかるべき、こなたへいらせ給へと侍る。とく〳〵と云ふに、帯刀よろこびて内に入る。

さして違いのない描写でありながら、七日余りの月に照し出された佗び住居の描写の中にただならぬ雰囲気を醸し出しているのは、帯刀を慕う

重衡の女と、正太郎を怨む磯良、この二人の情念の違いによるところで、前者を単に幽霊と言えば後者は怨霊と言うべきであろう。幽霊と怨霊の違いは、その死がなんらかのマイナスを蒙ったものか否かによる情念の相違にもとづくものであろうが、磯良につけば正太郎の「奸けたる性」によって悩され虐げられたことである。その正太郎の性をいまは逆手に取って、こんどは正太郎を破滅に追いこんで行くのである。

人の入るばかりに開けた客殿の中には、低い屏風の端から古い衾がわずかに見えていた。主人はこの屏風のかげにいると正太郎は思うのである。

あるじの女屏風すこし引きあけて、めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報ひの程しらせまいらせんといふに、驚きて見れば、古郷に残せし磯良なり。顔の色いと青ざめて、たゆき眼すさまじく、我を指たる手の青くほそりたる恐しさに、あなやと叫んでたをれ死す。

この場面は「牡丹灯記」になくてはならないところである。すなわち喬生が湖心寺に入って麗卿の柩を見て恐懼して逃げ出すところである。正太郎を導く若い女はいうまでもなく金蓮であり、磯良が正太郎に言いかける「めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報ひの程しらせまいらせん」と怨をこめて言うのも、湖心寺の門前で金蓮に「娘子久待、何一向薄情」と誘われた喬生が符女に「妾恨君深矣、今幸得見豈能相捨」と言われる恨み言に対応するところである。恨み言と言っても、決して怨念のこもったものではなく、その恨みが「愛恨」とも言うべきもので、相手になつかしさを含めた物言いであったことを知るべきである。秋成が同じ『雨月物語』の他の篇「浅茅が宿」で、亡霊となって夫に再会する宮木に「今は長き恨みもはれ〳〵となりぬる事の嬉しく侍り、逢ふを待つ間に恋ひ死なんは人しらぬ恨みなるべし」と、宮木の心情を「恨み」と表現し、磯良のそれを「さきに女の命をうばひ怨み猶尽ず」と言い、また「或は霹靂を震ふて怨みを報ふ」と区別していたのである。因に「牡丹灯記」の符女には「恨」とあり、前者ということになる。かくして「吉備津の釜」はプロットの上では対応しても、その怪異の相は「牡丹灯記」でも「牡丹灯籠」でもなかったのである。されば「我を指して」その青く痩せ細った指先に言い知れない戦慄感を正太郎ならぬ読者まで覚えさせられるのは、もはや救い難い「怨念」の所為なればこそのものであったのである。

やがて気づいてみると女の屋敷と思ったのに荒野の三昧堂で、そこに黒ずんだ仏像が立っているだけだった。恐れおののき走り帰った正太郎は事の次第を彦六に話す。彦六は精神が滅入っている時には迷わし神が憑くものだと言って刀田の里の陰陽師を紹介する。かくして正太郎には朱符が授けられて物忌みに籠ることになる。「牡丹灯記」につけば、彦六は隣翁、陰陽師は魏法師と言うことになる。

プロットの展開はそのままであったが、ただひとつ、秋成は「さきに女の命をうばひ怨み猶つきず、足下の命も旦夕にせまる、此の鬼、世を去りぬるは七日さきなれば」と、袖の死が実は磯良の生霊のなせるものであったこと、その怨念が正太郎に向けられつつあることを明かにしている。そしてさらに陰陽師に「我が禁しめを守らば九死を出でて全からんか、一時も過るともまぬがるべからず」とこのさき「牡丹灯記」とは異なる結果を迎える用意がなされていたのである。

こうしてしばらく関わって来た「牡丹灯記」とは再び離れて物語は終末を迎えることになる。陰陽師のことばそのままに磯良の死霊は、その夜更にもう現実のものとなるのである。そして夜毎に現れる怨霊は、日を追ってますます怨り狂いながら、ついに四十二日目の夜となるのである。

かくして四十二日といふ其夜にいたりぬ。今は一夜にみたしぬれば、殊に慎みて、やや五更の天もしら〳〵と明けわたりぬ。長き夢のさめたる如く、やがて彦六をよぶに壁によりていかにと答ふ。おもき物い

みも既に満ぬ。絶て兄長の面を見ず。なつかしさに、かつ此月頃の憂怕しさを心のかぎりいひ和さまん。眠さまし給へ。我も外の方に出でんといふ。彦六用意なき男なれば、今は何かあらん。いざこなたへわたり給へと、戸を明くる事半ならず、となりの軒にあなやと叫ぶ声耳をつらぬきて、思はず尻居に座す。こは正太郎の身の上にこそと、斧引提て大路に出づれば、明けたるといひし夜はいまだくらく、月は中天ながら影朧々として、風冷やかに、さて正太郎が戸は明けはなして其人は見えず。内にや逃げ入りつらんと走り入りて見れども、いづくにかくるべき住居にもあらねば、大路にや倒れけんともとむれども、其わたりには物もなし。いかになりつるやと、あるひは異しみ、或は恐る〳〵、ともし火を挑げてこゝかしこを見廻るに、明けたる戸腋の壁に腥しき血灌ぎ流て地につたふ。されど屍も骨も見えず、月あかりに見れば、軒の端にものあり、ともし火を捧げて照し見るに男の髪の髻ばかりかかりて、外には露ばかりのものもなし。

この場面は「牡丹灯記」の符女が衞生を棺の中に引き入れてとり殺すところに対応することになろうが、全く異なるプロットである。むしろ似ていると言えば先述の『善悪報はなし』であるが、秋成の殺しの描写はそんな単純なものではなかったのである。

かつて鵜月洋氏は「この部分の凄絶さは文章の妙というよりも読みの心理を計算した緻密な文脈の構成にある」[注5]と言われたが、明かに秋成にはその心づもりがあったようである。すでに青く痩せ細った指をさされた読者に、今度は日を追って募る正太郎と同じ緊張感と恐怖感を与えられているのである。それが四十二日目の「やゝ五更の天もしら〳〵明けわたりぬ」という時点で極限に達する。明けたと思った夜は、実はまだ明けてはいなかったのである。正太郎の錯覚と言うことになろうが、そうさせたところに人智を超えた怨霊のはかり知れない恐ろしさが漂うのである。こうして怨霊は正太郎を惑わせ、思慮の浅い彦六をかたらって目的を達するのであるが、それが当然ながら凄惨な手段でなされなければならなかったのである。その手段の卓抜さについては諸家の考証があるが、戸腋の壁に伝わって流れていた腥々しい血、それに軒端にひっかかっていた髻ひとつ、その他はなにもなかったという描写に恐怖のすべてが集約されていて、この世の誰でもが抗することの出来ない魔力の存在を思わせる表現であったのである。

三

「吉備津の釜」のこの末段はさすがに傑作であったようである。まず伊丹椿園が模倣し、つづいて山東京伝が剽窃さえ厭わないのである。同時代の知識人のひとりとして椿園は夙に秋成を意識するふしがあった。[注6]『深山草』（天明二年）の「娼妓死後に怨恨を報ずる説」（巻四）には「吉備津の釜」のこの末段を意識するだけで一話を成したものとさえ思われる。

梅村菊治は浪華の妓女常盤木と馴染み、それを娶うとするが許されず、一門の中から妻を迎えることになる。菊治の友人釜沢伝蔵が常盤木に横恋慕するが、操を立て、菊治の気変りも、その伝蔵のせいかと伝蔵を怨みながら縊死する。さてその死骸を葬るとき、死骸は起きあがり伝蔵に取りかかる。それを切り捨てたが、その夜から伝蔵は常盤木の怨霊に苛れることになる。伝蔵は高津の宮の神主近藤大蔵の神符を授かり十七日の間潔斉して祈祷すると怨霊も遠のえて行ったかに見えた。

一年あまりにおよび絶て姿をあらはさざりしかば、今ははや怨念もはれけるよと心ゆるまり、慎みもうすくなりて夏日炎熱の時に及び神符をかたはらの柱にかけ置、衣服刀も片よせて浴せんと、夕ぐれ椽側に出て快く納涼しけるに、晴たる空俄にかきくもり、さも凄まじき一陣の猛風さっと吹来るに、伝蔵すはやと驚き神符をとらんと立上る時、はや両手を取て引立るものあり、きっと顔を見れば二人の幽霊已前よ

りもおそろしき姿にて恨みを報ずべき時こそ来れと、莞爾と打笑みロより青き炎を吹出す有さまを見て、傍にありし男女あっと叫びてこと〴〵く悶絶しありけるに、此物音を驚き近隣の人々集りて、かた〳〵に水をそゝぎ薬をあたへて呼活けるに、伝蔵がすがた見へざれば、あやしみそこ爰と尋けるに軒をつたふて落る滴あり、雨もふらざるにふしぎやとよく見れば鮮血なり。偖こそと屋上を火に照し伺へば伝蔵を二つに引裂捨置たり。おの〳〵思はず尻居にふし身の毛よだちて恐れあひける。

こゝには例の「吉備津の釜」の末段だけではなく、磯良の生霊が正太郎の前に現れる件、「顔の色いと青ざめてたゆき眼すさまじく、我を指したる指の青きほそりたる恐しさにあなやと叫んでたふれ死す」と言う戦慄すべき場面も重なっているのは、磯良の生霊と死霊を併せたかのふしがある。軒を伝って滴たる鮮血をたよりに尋ねると伝蔵は屋根の上に二つに引き裂かれていたのである。この所為は仮名草子このかた（例えば「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」△『曽呂利物語』▽）怪異小説でもっとも残忍な所為のひとつとして描き続けられて来たものであるが、それだけに猟奇的な醜悪さが異常に残り、恐怖感以前に多分に形式的な処置と思わせるところがある。椿園のようにこの一話をよしなき恋慕を戒める教訓をもって結ぼうとするものなら、それはそれでよかろうが、「吉備津の釜」の迫真性とは凡そ異質な印象が残るのである。

四

京伝の「復讐奇談安積沼」（享和三年）は、またの名を「小幡小平治死霊物語」と言う。小幡小平治は江戸の役者で、殊に幽霊役に妙を得たが、その人気も僅か三年と続かず、果ては旅役者となって奥州を旅稼業中、浅香沼で同僚のために殺される。その小平治の怨霊が仇を報いる（「俳優叢談」）と、いかにも幽霊役者らしい生涯であった。それを京伝はこう改めた。小平治の妻お塚は安達左九郎と密通し、左九郎はお塚を我ものにしようと謀り、小平治を安積沼の釣に誘い水中に突き落してしまう。江戸に帰った左九郎は早速お塚を訪ねる、すると小平治はすでに帰宅して疲れていまだ寝間にいると言う。

左九郎聞て、それは怪しき事なり。彼所に行きこゝろむべしとてお塚とともに房間に入りやをら屏風をひきあけんとする時、裏より青く細りたる手くびをさし出し、屏風を押へて開かしめず、猶強く開かんとせしに裏より屏風の縁にかけたる五つの指ばらばらと落ちて屏風は自ら開り、裏には人影見えず、只臥具のうちより一団の陰火まろびいで引窓を越えて飛去りぬ（巻四―八）

左九郎とお塚の見たものはまぎれもなく正太郎の見た磯良の怨霊であった。秋成が正太郎の心象を視覚に訴えて、そこにリアリティを創らうとする。京伝はまた「屏風の縁にかけたる五つの指ばらばらとこぼれ落ち」と同じリアリティを求めても質に於いて同じではない。後日南北が『東海道四谷怪談』で、お岩の指の爪が伊右衛門の持ち去ろうとする蚊帳に付いて抜け落ちるという無気味な趣向と同じで、事を構えて恐怖心に訴えようとするのも、かえって醜悪な印象だけが残るのである。

九平治の怨霊はお塚について離れず、さすがの強気のお塚もついに発狂する。そうしたある日、みすぼらしい姿をした祝部が朱符を授けて去る。

かくて神符を門に貼し窓に貼し、つゝしみて守りけるが、その夜三更の頃おそろしき声して、今夜はとて行かんと思ひしに憎き奴、こゝに尊き符文を設くるよとつぶやきて再び声なし、左九郎は終夜妻を守り、いまやとらるべきと魂も身にそはず、やう〳〵夜明ぬれば、いき出たる心地して、祝部が詞を奇なりとし、ひたすら神明を念じて怠らざりしが、此夜は、松吹く風物をたふすが如く雨さへ強くふりて、常ならぬ心のさまなるに四更の頃窓の紙にさと赤き光さし、あな憎き奴

こゝにも貼つるはと、いふ声きこゆ、深夜にはいとゞ凄じく左九郎は毛髪さかしまに竪て、暫くは死にいりぬ、明れば暮るゝを愁ひ暮るれば明るをまちわびて、此日ごろを過ること千歳をおくるよりも久し、寃魂は夜毎に家をめぐり、或は屋の棟に叫びていかれる声夜ましに凄じく、かくして三十二日といふ其夜になりぬ、今は一夜にみたしぬ、今夜だに脱るれば妻の命助るべしと左九郎ことに慎み守りて、やゝ五更の天しら〳〵と明わたりぬれば、今は長き夢の醒めたる思ひをなし、少しく心をやすめて、厨にいたり引窓をひらくに、こはいかに明たりと思ひし夜は未だくらく、月は中天ながら影朧なり、冷かなる風さと吹くにつれて一団の陰火飛入ると見えしが、屏風の裏に啊と叫ぶ声耳をつらぬき、おぼえず尻居に槌と坐す、こは妻が身の上にこそといそがはしく屏風をおしのけて見るにお塚は見えず、重き病に腰たゝねば避逃るべきやうはなく、いづこに隠るべき住居にもあらねば、いかなりつるやと或は怪み、或は怖る〳〵ともしびをとりて、こゝ彼所と見めぐりけるに、窓のある壁に腥々しき血そゝぎて流れて地に伝ふ、されども屍も骨も見えず、月あかりに見れば軒のつまに物あり、ともし火をかゝげて見るにたけ長き女の髪の毛ばかりかゝりて、外には露ばかりのものもなし、浅ましくもおそろしさは筆に尽すべうもあらず、夜明けて近き辺を探索むれどもついに其跡さへなければ、左九郎悲しみ愁ふることかぎりなし、

紛れもなく「吉備想の釜」末段の剽窃である。それでもあれは男、これは女であったから、さすがに「髻ひとつ」とはいかず、「長き女の髪の毛ばかり」が軒端に掛っていたと言いなおさなければならつかった。一体、この両者に怪談の道具立ての上でどれだけの違いがあろうか。にもかゝわらざ秋成の描写には数段の凄さがあると見るのは、京伝が秋成を模倣したと言うことではない。ただひとつ「冷かな風さと吹くにつれて一団の陰火飛び入ると見しが」と、言わずもながの説明があったからである。説明はこれにとどまらず、屋上で左九郎の首に喰い付いた小平治の物凄い形相の挿絵さえあったのである。さらに言えば山口剛氏の見られた初刷本には御丁寧にも二度刷りの赤い血潮の色までが加えてあったと言う。火の玉と化した小平治の魂は再びその姿を現わして怨敵左九郎をとり殺したのであると京伝は言いたかったのである。されば語らずして読者を戦慄させた秋成にくらべて、あまりにも稚拙な京伝の思いつきではなかったか。

五

秋成を介して「牡丹灯記」の世界を垣間見た京伝は、やはり「牡丹灯記」のすべてを我がものにせずにはおかなかった。京伝には後に「小説浮牡丹全伝」(文化六年)があるからである。これには、京伝自らが「此春やつかれ牡丹灯記を翻案して浮牡丹全伝といふ小説本四冊を編して已に世におこなふ」と、つづいて著わす合巻「戯場花牡丹灯籠」(文化七年)に宣伝するものであった。

翻案といっても『伽婢子』の「牡丹灯籠」のように原話に忠実に従ったものではなく、謡曲『女郎花』に「牡丹灯記」を付会したもので、御家騒動やら仇討ちやらを交えた京伝一流の長篇の中の一部であって、巻三「辟邪鈕号」の第三回がそれである。

瑤島豹太夫の一子磯之丞は十九才の眉目清雅な若者、学問武芸を志し家僕弓助を伴って洛外山崎に寓居する。今日も師匠を訪ねての帰るさ男山八幡に参詣する。

頃しも七月盂蘭盆の時なりければ、此所彼所に高灯籠をともし、寺々には灯籠の飾物、或は花鳥或は草木、さま〴〵しほらしく造りなして、其の裏に灯火をともしてかけつらね、其の光あたかも白日のごとくなり、又それ〴〵の塚に到り、聖霊を迎ふるとて手毎に灯籠を提げて、ゆきかふ人あまたあり、磯之丞は道々彼方此方の寺院に立よりて

灯籠を一覧し、覚えず時をうつしけるにぞ、往来ふ人も稀になり、寺々の灯火も消えて、物音も静かなりければ、いざ帰らばやと思ひ急ぎ行きけるに、年のころほひ十一二歳とおぼしき斬禿の女童、容貌きよらにいやしからざるが美麗しく造りたる牡丹の花の灯籠を提げて唯一箇来り、磯之丞に対ひていふやう「妾は此の近き辺に宮仕しはんべる者なるが、今宵霊迎の為、其の墓にまうでずるに途中に具したる人を見失ひ幼き身の夜道なれば、何となく物恐ろしうて、道の案内はしりながら、ひとり帰るになやみ候、こひねがはくは君妾を伴ひて、住家に送りたまはるまじや、馴れ〳〵しき者とおばされんがせんかたなさに願ひ候、

かくして磯之丞と女童は相伴て行く。この磯之丞の灯籠見物の場面は、京伝はすでに『優曇華物語』（文化三年）の巻五「皎二郎弓児盂蘭盆の灯籠を見る事」で描いていた。

此国にも年毎の七月十五日より二四日までは精霊の棚をかざり家々にこれを祭る、又いろ〳〵の灯籠をつくりて或はまつりの棚にともし、あるひは民家の軒、寺院の仏殿にもともす、又寺にては施餓鬼を修行し、村々には踊を催す、これなべて此頃の風俗にて唐土の上元の佳節に似たり、これを見る人、道もさりあへず甚賑なり、健助も霊棚をかざりて兄衛守妻真袖が新霊をむかへけるが、皎二郎にむかひて此節は所々に灯籠をともして甚賑なり、今宵は姫君をもともなひて灯籠を遊覧したまへて、このほどの鬱悶を慰めたまはゞやとすすめければ両人その言にしたがへ、

京伝お気に入りのこの場面は三度まで採られて『浮牡丹全伝』の当該個所となったが、この度は『伽婢子』の「牡丹灯籠」に泥む表現が目につくところ、そう見ると磯之丞という名前までが「牡丹灯籠」の新之丞に似ていはしまいか。それにしても構想がいつの間にか「吉備津の釜」にひかれて行くのは、おそろしいまでの秋成の筆の魔力である。その磯之丞は正太郎が墓参りの女に誘れて行くように、これまたひかれて女の住居を訪ねるのである。

扨草深き野道を行く事十四五町ばかりにして、少しく奥まりて松杉の一むら繁りたる所にいたり、女の童のいへるは、こゝこそ妾が宮仕まゐらする所なり、苦しからざれば此方に到り給ひて、しばし道の労れをもはらし給ひてんやと、いひつゝ導きて冠木門の裏に通うし、一間の座敷に居らしめて、彼の牡丹の灯籠を軒端にかけおきて、おのれは奥の方に行きぬ、

磯之丞にはまさにやんごとなき人の館を思わるのであった。構想を「吉備津の釜」にとりながら、直接拠ったのは『垣根草』の「伊藤帯刀中将重衡の娘と冥婚の事」である。磯之丞が女の面影を忘れられず悶々とするところなどはまさに同文の剽窃でさえあった。

磯之丞は女を訪ねること七夜、下僕の弓助が不審に思ってその後に従ってゆく。その屋敷は磯之丞の目に映るのとは全く違って家も庭も荒れ放題で、ただ女郎花だけが今を盛りに咲き誇っていた。磯之丞はと見ると、

軒端に牡丹の灯籠をかけたる座敷に、菰席しきて、灯台のもとに磯之丞一具の骸骨によりそひて居たり、其の傍辺に三つの骸骨あり、又ちひさき婢子、人のごとくに団扇を把ちて、磯之丞をあふぎ居たり、磯之丞何やらんものいへば骸骨手足うごき髑髏うなずきて、口とおぼしき所より声ひゞきいでゝ物語す、

こんどは『伽婢子』の「牡丹灯籠」の剽窃で妖しい鬼気迫る場面の再現であったが、京伝には一工夫した挿絵があった。見開きの挿絵はまず絢爛たる屋敷で姫と睦言を交わす磯之丞があり、これをめくると、うって変った廃屋で骸骨に寄り添う磯之丞となる。軒場の牡丹灯籠の妖しい光に映し出された変幻極りない相異る二つの世界が交互するのであった。その灯籠の光を慕って群がる胡蝶、それを目掛けて狂う手飼いの猫が柱

にかけ登る。すると冷かな一陣の風が吹いて灯籠の火が消える。雙頭の牡丹の花を慕う蝶二つ、それを目掛けてとびつく猫、京伝好みのこのプロットは、のち『双蝶記』(文化十年)で再び登場するが、磯之丞の夢幻世界彷徨もそこまでゝあった。弓助に事の次第を教えられ諭され家に帰って行く。

それから数日、再度その廃屋を訪ねた磯之丞の夢に現れた女は、磯之丞とは前世の契りのあることを語る。それによると磯之丞の前々世は播州天王寺の僧房に飼れた牝猫であり、女はそこの牡猫であった。牝はいつも経蔵を守って経巻を食む鼠を制した善因で前世には人間として生まれて小野頼風となり、この世でも前々世の宿縁で再度人間に生をうけて磯之丞となったのである。しかるに牡は俗家を往来して魚肉をあさり、仏具を穢した悪縁で、前世では女郎花という女に生まれて頼風と夫婦になったが非業の死を遂げる。現世でも前々世の宿果によって人間として生をうけられず幽鬼となって磯之丞に近づき年来の執心を晴らしたというのである。

かくして両人の関係は前々世まで遡って語られることになる。すなわち「牡丹灯記」の番生符女の関係を三世因果の理法で説こうとするところに京伝の新しい試みがあったもののその大方は謡曲「女郎花」に拠ったものであった。

さて、磯之丞の訪ねた屋敷は、実は寺の三昧堂で、辺り一面に女郎花が咲いて、その奥には苔した五輪の塔が二つあって、それを覆う柱には牡丹の灯籠が掛っていたのである。

折りしも磯之丞に国元より帰国を促す書状が届く、名和家伝来の重宝浮牡丹の香炉を将軍足利義政に献ずることになり、その任にあたった父豹太夫が伯耆の田原峠で宿怨の者に討たれ香炉も奪れてしまう。そのため義政の不興を蒙り、瑤島家は阿房払いとなって四散する。かくして磯之丞は父の仇をさがして出立するが、この顚末は巻四以降に委ねられ、以後は二度と「牡丹灯記」と関わることはなかったのである。

六

「牡丹灯記」の読本での人気は自ずと歌舞伎の舞台にも及ぶことになった。鶴屋南北の『阿国御前化粧鏡』の上演は、京伝の『浮牡丹全伝』の出たその年文化六年六月江戸は森田座の夏狂言であった。南北としては初期怪談劇のひとつで、その第一番目の五立目、いわゆる「元興寺の場」が「牡丹灯記」と関係するところであるが、要するに阿国御前の怪談に『伽婢子』の「牡丹灯籠」を借りてのものであった。

舞台はこれよりさき、佐々木家の家臣狩野四郎次郎元信が、お家の跡目相続に必要な系図一巻を阿国御前から色仕掛けで欺し取る。その働きによって銀杏の前と祝言をあげる。それを聞いて阿国御前は嫉妬のあまり悶え死んでいたのである。さて「元興寺の場」は、念仏太鼓に従って舞台では牡丹の灯籠を提げた腰元が登場する。

旦那様も御参詣の筈のところ、今宵はわたしを御代参、コレ御覧じませこの牡丹の灯籠を御堂へあげて、また持って帰って明日の夜も御灯をあげに参りますわいなァ、

と言うのは御国御前に仕える腰元撫子である。その撫子に導かれて乳呑子をつれた元信と銀杏の前は阿国御前の御殿へとやって来る。撫子の挑げる牡丹灯籠、そのあとに元信と銀杏の前が続く、舞台の「牡丹灯記」は小説とはまたひと味違った妖しい艶かさが漂っていた。

阿国御前が元信の前に姿を現わす。悶死した亡霊であったが、それが元信にはわからない。「お国御前を四郎次郎よも見忘れは致すまい」の恨み言葉は「牡丹灯記」の番生に対する符女のものであった。また「牡丹灯籠」の新之丞に対する弥子のそれでもあったが、当然のことながら正太郎に対する磯良の「吉備津の釜」の物凄い場面も併されていたのである。阿国御前の怨霊は銀杏の前を斥けて元信を自分に従わせようとす

る。その時土佐又平重重興の持つ尊像の威徳は、御国御前の姿は忽ち異形と化し、御殿は朽ち果てた荒寺となり、灯籠は粋けて牡丹の花びらがハラ〳〵と落ちて仏前の古い灯籠となって、その中から奪れた系図一巻が現れる。異形と化した御国御前はと見れば、これまた髑髏となって、五立目の幕がおりる。

この場面は、京伝の『浮牡丹全伝』に似ていた。女の童に導かれた磯之丞は草深い野辺を行く、その彼方には優雅な屋敷があった、しかしそれは優雅どころか古寺の三昧堂で、女郎花の中に五輪の塔が苔し、その覆いの柱には牡丹の灯籠が掛けられていたのである。

『浮牡丹全伝』の刊行が『阿国御前化粧鏡』にわずかに先行することから、南北が京伝を真似たと言われないこともないが、南北ほどの狂言作者が、それほどまで人気のあった「牡丹灯記」を閑視することもあるまい。妖しさと艶かさの中に恐ろしさを綯ぜにした「牡丹灯記」の怪談劇は名優松助（初世）をもって舞台の上にも盛んな人気を博すところとなったのである。

それにしても、この狂言の興行には芝居茶屋では反対するものが多かったと言う。今更松助の怪談狂言でもあるまいと、その当たりを疑ったのである。しかし南北は松助を励まして開演にこぎつけたのであるが、開けてみれば大当りで、わずか一、二軒の芝居茶屋だけが大儲けをしたというエピソードもあった。ともあれ、阿国御前の怪談に「牡丹灯記」をあしらったその趣向に人気ありと見た南北の目には狂いはなかったのである。

七

南北の狂言に刺戟された京伝は、こんどは絵草紙と出たのである。「牡丹灯記」を合巻に仕立てた『戯場花牡丹灯籠』を著わすのが翌文化七年八月であった。「戯場花」を「かぶきのはな」とよませたところに『阿国御前化粧鏡』との関係を窺わせるだけではなく、京伝自からも発端で言うところがあった。

牡丹灯籠の事は原明の洪武十一年、呉山の宗吉先生の著はす剪灯新話の牡丹灯記より出たり、本朝寛文年中浅井了意といふ人の著はす於伽婢子に牡丹灯記をかなぶみにやはらげ載せたり、此春やつがれ牡丹灯記を翻案して浮牡丹全伝といふ読本四冊を編して已に世におこなふ今歳夏六月尾上三朝が狂言牡丹灯を趣向して、古今まれなる大当りにして見物群集をなし、牡丹灯の花、時あって開き児女の眼をこらすに至れり、於此やつがれ再び牡丹灯のともし火をかゝげ、児女をなぐさむ伽婢子にかえまく思ひて一部の絵草紙となり、板元富貴草ともならば幸ひ甚しといはん

「牡丹灯記を趣向した尾上三朝の狂言」とは件の『阿国御前化粧鏡』のことであろうが、その当りを見ての京伝の絵草子（合巻）であった。

この合巻は「剪灯新話をやわらげお伽婢子の昔かたり」と角書きし、開巻第一に「牡丹灯記」の冒頭の原文をそのまま置くと言ったまでの凝りようであった。そしてそのあとは京伝おきまりの、読本で再三使った、あの牡丹の灯籠を挑げて行く場面であった。

扨て小野の頼風は我身の武運を祈るため時しも七月十五日、かの男山の八幡へ参詣し帰り途にて夜に入りけるが、月を眺めて、女郎花の露踏みつけつつ帰りけるにも年も二八と見ゆるやんごとなき姫君十二三なる女の童の灯籠を下させて後より来る。其灯籠を能くみるに我手細工の絹ばりの牡丹灯籠なれば、さればこの間誂へし灯籠の主は此の姫にてありけるかと、近寄りて能く見れば、これ則ち女郎花姫にてありければ、これは〳〵と驚き、

ほかならず『浮牡丹全伝』の合巻化であった。

どこまでも続く京伝の「牡丹灯記」への執着ぶりであろうか。こうして読本に歌舞伎に、そして合巻にと「牡丹灯記」は際限もなく文芸の世

界にとり入れられて行ったのが、文化年間、世はの泰平の時代であったのである。

(注1) 山口剛氏『名著全集江戸文芸之部・怪談名作集』解説。
(注2) 鵜月洋氏『雨月物語評釈』(角川書店)。
(注3) 鈴木敏也氏『雨月物語新釈』。
(注4) 池田弥三郎氏『日本の幽霊』(中央公論社)。
(注5) (注2)と同じ。
(注6) 拙稿「椿園の小説」(一)(長野短大紀要21号)。